

～ハツとしたとき出るエッセイ～



坊守のひとりごと



愛知県安城市和泉町中本郷41

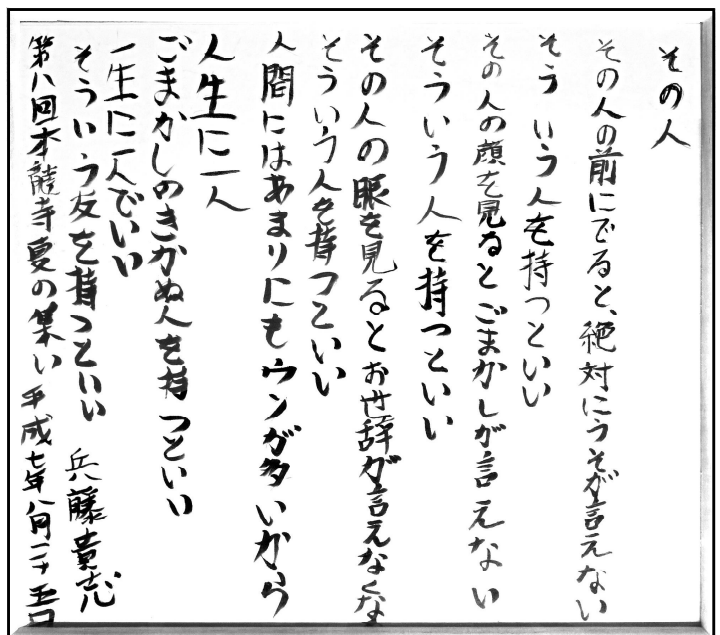
2022年8月30日号

「27年の歳月を超えて」

8月下旬になると本龍寺では「児童夏の集い」といって、参加者が小学校4～6年生、スタッフとして中学生～大学生・日曜学校OBの社会人などが集って、一泊二日の楽しい研修会が行われます。今年で連続35年目の開催でした。ただコロナ禍のため、ここ3年間は夜のバーベキューや宿泊が出来ず、一日研修になっています。

今年のカレーライス作りの打合せ時に、^{どうぼう}同朋婦人会のお一人が「息子の部屋にずっと飾ってあった色紙です」と見せて下さいました。

当時、保育士としてフルタイムで働いていた母親である彼女は、4年生の息子さんがお寺の夏の集いに参加していたことなど知らなかったそうです。27年経って、自分がスタッフとして関わるようになって、今まで部屋の隅にずっとあったその色紙に初めて目がとまったのです。小さい時にお寺に来て、こんな言葉に出遇ってくれていたことが嬉しいです、お世話になっていたんですねとしみじみ語って下さいました。



↓平成7(1995)年 夏の集い 集合写真



27年の歳月を超えて、母子の新しい出遇い直しがあったという素敵な事実にも、お寺のご縁って凄いなあと心から思わせていただきました。

ところで、平成7年8月25日の文字を見て、忘れられないあの日のことが鮮明に蘇ってきます。35年の歴史の中で、唯一参加できなかつた回なのです。この年はパン作りに挑戦していて、同朋婦人会さん〈会長は沓名タツエさん〉や中学生高校生スタッフと綿密な打合せをしました。小学生のサポート、隣家のオープンでパンを焼く係、運ぶ係。他にも2日間の食事作りと夜のバーベキューの支度…。

ところが身重^{みおも}だった私はといえば、初日早朝から陣痛が来て入院。お昼過ぎに、第三子の二女が誕生したのでした。

夏の集いが終わった日の夕方、住職がお見舞いに来てくれました。子どもたちが焼いたパンを食べながら、涙がぼろぼろとこぼれ落ちました。

さて、色紙の言葉は書の詩人・相田みつを氏の詩です。他にも色紙にした作品はたくさんあって、たとえ小学生の時には分からなくても、10年後20年後に出会い直しをして響いてくれればと、子どもたちに届けてきました。



いのちの根
なみだをこらえて
かなしみにたえるとき
ぐちをいわずに
くるしみにたえるとき
いいわけをしないで
だまって批判にたえるとき
いかりをおさえて
じつと屈辱にたえるとき
あなたの眼のいろが
ふかくなり
いのちの根が
ふかくなる

いのちの根育て
つみ重ねられない時も
つみ重ねなさい
くじける時も
つみ重ねなさい
死にたいと思う時も
つみ重ねなさい
どんなことに出会っても
つみ重ねることでは
活路は開かれない
つみ重ねなければならぬ時に
つみ重ねられないのは
人に感謝することの出来ない
自分の高ぶりにあるのです

本龍寺夏の集いは住職と二人、試行錯誤しながらいろんなことに取り組んできました。リサイクル工作やさまざまな工作、バイパス土手のゴミ拾い、座禅、パン・うどん・そば作り、写経、



トイレ掃除、登山、梨狩りなどなど。仏さまの元で思いっきり遊び、手を合わせ奉仕する生活は、敬いの心や豊かな感性を育む貴重なご縁となります。また多感なこの時期に歴史を重ねた念仏の道場で枕を並べて語り合った経験は、子どもたちの人生においてもかけがえのない体験になるものと信じながら。

↑平成29(2017)年 夏の集い 鳳来寺山登山

坊守 樋口頼子